

<論文>遣唐少録山上憶良外伝

著者	益田 勝実
雑誌名	日本文学誌要
巻	35
ページ	2-11
発行年	1986-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019468

遣唐少録山上憶良外伝

益田勝実

則天武后の遣唐使招宴の勅

歌人山上憶良については、すでに『万葉集』専門の研究者たちが細大漏らさず調べ上げており、付け加えることはほとんどない。それでも、あれも、と思うものがある。

中西進氏の『山上憶良』を読んだとき、それならあれも、と思った。氏の博搜の網にからずにいるのを不思議と思いながら。氏の著のなか、「長安の生活」のところに、こう記されていたからだ。

長々と続く異国の風物と、重ねられる接待の何十日かに、昂ぶる神経を休める暇もなく、憶良は長安の贅を踏んだのである。

長安において如何にあったか、直接にこれを語るものとしては新唐書東夷伝があるのみである。

長安元年其の王文武立ち改元して大宝と曰ふ。朝臣真人粟田を遣して方物を貢す。朝臣真人は猶唐の尚書のごとし。……真人学を好み文を属す。進止容あり。武后麟徳殿に宴し司膳卿を

授けて還す。

これによれば、行動としては麟徳殿における賜宴が知られる唯一のものであるが、武後の目に「進止容あり」と映じた宴席に、憶良も加わっていたらう。(傍点益田)

といっても、大きな落穂拾いができるわけではない。このときは、中西氏の著も言及しているように、『旧唐書』本紀第六の則天武后の長安二年(七〇二)条に、

冬十月、日本国遣使貢方物。

とある。また、同書列伝卷一百九十九の東夷の項に、一年ずれて、つぎのようにある。

長安三年、其大臣朝臣真人来貢方物。朝臣真人者、猶中国戸部尚書。冠進徳冠、其頂為花、分而四散、身服紫袍、以帛為腰帶。真人好読経史、解属文、容止温雅。則天宴之於麟徳殿、授司膳卿、放還本国。

中西氏が主として拠って論じている、『新唐書』は、列伝第一百

四十五の東夷の記事で、内容は『旧唐書』をふまえ、やや違いがある。

長安元年、其王文武立、改元曰大宝。遣朝臣真人栗田貢方物。朝臣真人者、猶唐尚書也。冠進德冠、頂有革纒四披、紫袍帛帶、真人好學、能屬文、進止有容。武后宴之麟德殿、授司膳卿、還之。

『旧唐書』に付け加えた、「長安元年、その王文武立ち、改元して大宝といふ」は、当時の資料に基くものではなく、後に入手した資料を用いたものだろう。日本には、文武という天皇の漢風諡はまだなかった。その資料に大宝元年とあって、即位による改元と速断したものだろうが、誤解であった。それを書き入れたため、かえって、肝心の遣唐使入京・招宴の年次を記し忘れる結果となったようである。（『太平御覽』卷第七百八十二日本・『唐会要』第一百日本国は、『旧唐書』を採っている。）

日本側の『続日本紀』が、大宝二年（七〇二）六月に、

乙丑、遣唐使等去年從筑紫而入海、風浪暴險不得渡海、至是乃発。と記しており、『旧唐書』本紀が長安二年（七〇二）冬十月に日本の遣唐使が（おそらく長安に）到着したというのと照応するから、即天武后が使節を接見し、宴を開いて歓迎したもの、ほど遠くない、その年のうちと見るべきではあるまいか。ところで、わたくしが問題にしたいのは、その時の宴を開くように命じた武后の勅の文章が、新旧両『唐書』以外の資料として、そっくり残っているということなのだ。

宴集日本国使臣勅

日本国遠在海外、遣使来朝。既涉滄波、兼献方物。其使真人莫問等、宜以今月十六日於中書宴集。（『欽定全唐文』卷十七中宗）

『全唐文』に収載されているこの時の勅が、これまで人びとに注目されなかったのは、これが、そこでは、中宗が下した勅として扱われているからかもしれない。しかし、山上憶良が遣唐少録として一行に加わっていた、執節使栗田朝臣真人の率いる遣唐使は、前回からは実に三十三年ぶりの派遣で、次の遣唐使までも十五年の間隔がある。はじめの、中宗が即位、母親の即天武后が臨朝称制していた時代（六八四～六九〇）、次の武后が皇帝となり、周王朝を名乗った時代（六九〇～七〇五）、中宗が復位し、国号を唐に戻した時代（七〇五～七二〇）の、どの段階を通じても、日本からの遣唐使は、この時ただ一回しかない。

『全唐文』は、いかめしくは『欽定全唐文』と呼ばれるように、清の嘉慶のころ皇帝の命を奉じて編まれた一千巻で、この長安二年の勅を拾ったのは功績だが、即天武后でなく、中宗が発したものとしたのは、考証が足りなかったであろう。

勅の文中の人名「真人」が栗田朝臣真人を指すことも、これがこの時のものであることの証左であろう。勅はいう、「日本国は遠く海外にありて、使を遣して来朝せり。既に滄波を涉り、兼ねて方物を献ず。その使真人莫問ら、宜しく今月十六日を以ちて中書に宴集すべし」と。「宴集」は、「宴会」と同じく、おおいで宴を催すことである。わたくしが読み解けないのは、「真人莫問ら」の「莫

問」。人名だろうが、このときの執節使粟田朝臣真人の随員、坂合部宿祢大分・許勢朝臣祖父・鴨朝臣吉備麻呂らのなまえを考えてみても、該当しそうなものがない。^(註)

それはしばらく措くとして、中国史上唯一の女性の皇帝即天武后(當時は皇帝と呼ばれ、死後、国号を唐に戻して、后と呼ばれるような扱いを、息子の中宗・睿宗の時代に受けることになったのだが)の最晩年に、山上憶良は、使節の最末席につらなって拝謁するという稀有の体験をしたのだった。もっとも、女性の皇帝ということだけなら、日本では、しばらく前まで持統女帝の治世だったのだから、さほど驚かなかったかもしれないが、遣唐使として唐王朝との修交をめざして、前年から渡洋の好機を筑紫でうかがい、ようやく彼の地に着いたら、むこうは、もう唐王朝ではなくて、ずいぶん前から周王朝に替っていたことからの、一連のショックは大きかっただろう。

遣唐使が帰国したのは慶雲元年(七〇四)だったが、その一行からの報告には、この驚きが第一に掲げられている。

秋七月甲申朔、正四位下粟田真人自唐国至。初至唐時、有人来問曰、何処使人。答曰。日本国使。我使反問曰、此是何州界。答曰、是大周楚州塩城県界也。(『続日本紀』)

「ここは何州の地でしょうか」と、ようやく着岸しえて、その国人に尋ねると、「大周の楚州塩城県というところだよ」と答えた。一行の仰天しようすが、それにつづく問答によくあらわれている。「えっ、いままで大唐だったでしょう。いつから大周になったんですか」

更問、先是大唐、今称大周、国号縁何改称。答曰、永淳二年天

皇太帝崩、皇太后登位、称号聖神皇帝、国号大周。(同)

もう唐という国ではない。外交使節団がめざした相手国は消失していた。その国人は、十九年前、永淳二年(六八三)に、唐の高宗がなくなり、そのあと、皇太后が帝位にのぼり、聖神皇帝ということになって、今は国も大周になったんですよ、といった。実際には、国号が周となったのは十二年前(六九〇)だったのだが、この人は、それを一つづきのこととして説明したらしい。もっとも、即天武后の垂簾の政が行われるようになったのは、上元二年(六七五)のこと、二十七年も前からだが、長い没交渉期間を間にはさんでのことだから、そういう政情の変化について、遣唐使一行は全く知らなかったのだ。

山上憶良が大陸に渡り、彼の地に滞在したのは、内政・外政ともにほぼ安定し、充実をつづけてきた周王朝の末期で、その瓦壊が急激に進行する直前であった。

(註) 『日本書紀』神功皇后四十六年条に、百濟人「莫古」の名が見え、現在普通にはマクコと訓むが、古訓にマコとある。また、顯宗三年条にも、百濟の官人「内頭莫古解」の名が見える。内頭は官職名。それゆえ、「莫問」の「莫」を、マクもしくはマと訓むことはできるが、「問」はどう訓めばよいか。『万葉集』では、モの表記に用いているが(巻二の一〇〇と一一九)、マクモもマモも、この時の遣唐使中に該当者がいない。

また、「問」を問の誤写と考え、「莫問」、すなわちマロではないかと憶測してみても、一行のうちの鴨朝臣吉備麻呂や錦部連道麻呂たちのマロを、執節使につづく大使・副使らの名を挙げずに、「真人」と並べて皇帝の勅に掲げるはずはない。不審である。

「本郷を憶ひて作る歌」の樂天性

この時の遣唐使の帰国は、一度にではなかった。それをめぐって、憶良の滞在期間・帰朝の時期など、考えてみるべきことが多い。

『続日本紀』によれば、執節使栗田朝臣真人は、慶雲元年（七〇四）七月に帰ってきたが、この人の位を進め物を賜い、労をねぎらう式は、翌二年八月に行われた。使節一行でまだ帰り着かない人びとを待っていたが、待ちきれずにこのことがあったものだろう。そのまた翌年、慶雲三年二月になって、

丙申、授船号佐伯從五位下。入唐執節使從三位栗田朝臣真人之所乗者也。

という、遣唐船の第一船に從五位の下の位を賜った、やや意外の記事が出ている。この船だけが授位の対象となったのは、第一船だけが無事帰航したことの価値が、僚船が戻って来ないため特別視されたのだろう。四年（七〇七）三月になって、

庚子、遣唐副使從五位下巨勢朝臣邑治（発遣発令時には祖父と記す。）等自唐国至。

とあり、八月に、

辛巳、入唐副使從五位下巨勢朝臣邑治等進位有差。從七位上鴨朝臣吉備麻呂授從五位下、水手等給復十年。

とある。それでも帰国できなかった人たちは、次回の遣唐使の入唐を待ち、その帰国についてやっと帰ってきた。洋上で、再度遭難したのだろうか。養老二年（七一八）十二月の『続紀』の記事、

甲戌、進節刀。此度使人略無闕亡。前年大使坂合部宿祢大分亦隨而來歸。

が、第一次から十四年遅れての帰国の記録である。たいへんな辛苦を重ねたのであろう。

憶良は、それ以前、靈龜二年（七二六）四月に伯耆守に任じられていることが、同じ『続紀』でわかるから、第三次帰国組でなかったことは確かだが、慶雲元年の第一次帰国者のなかに入っていたのか、慶雲四年の第二次帰国者のなかのひとりだったかは、直接に明らかになり手がかりがない。

憶良がどちらの組に加わって日本へ帰ってきたかわからない、と言っておいて、そのすぐあとにいうのも妙だが、外証としてはそうだが、わたくしは、憶良は、好運にも執節使栗田朝臣真人の第一船に同乗していて、第一次に帰国したのだろう、という心証を抱いている。第一船以外はすべてこの時には帰れなかったのだが……なぜ、そう考えるのか。

山上憶良、大唐に在る時、本郷を憶ひて作る歌

いざ子ども早く日本へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ

（巻第一・六三）

は、中国で船出をまえにして歌ったものと思われるが、大洋渡海の難事業にたちむかう旅立ちの歌ながら、実に朗らかな同行者への呼びかけの形の前祝い歌である。前途の苦難、死を賭しての道中を思う、かげりがない。それが第一次の船団船揃えの活気のなかで歌われたとしても、もし、憶良の乗船が、出帆後遭難し、どうにか大陸へ舞い戻ったのだとすれば、憶良が、自分ではよくできた歌と思っていたとしても、慶雲四年の帰国後、その実効のなかった予祝の歌を、後世に残すだろうか。同行者たちも、その歌を記憶していて言

い伝えるだろうか。また、それを第二次の船出にあたつての作だともれば、前回の手痛い渡洋失敗の体験者が、風よ運よくあれ、浪よ荒びずに、という願いを少しも歌わずに、ただ「いざ子ども 早く日本へ」と逸る気持だけを歌い上げうるものだろうか。

後年、憶良が、第九次遣唐使として渡唐する大使多治比広成を、出発まえに自宅に招いて、送別の催しをし、翌々日、さらにはなむけの長歌を贈ったことがある。

好去好来の歌一首反歌二首

神代より 言ひ伝て来らく そらみつ 倭の国は 皇神の 厳しき国 言霊の 幸はふ国と 語り継ぎ 言ひ継がひけり 今の世の 人もことごと 目の前に 見たり知りたり 人さには 満ちてはあれども 高光る 日の大朝廷 神ながら 愛での盛りに 天の下 奏したまひし 家の子と 選びたまひて 勅旨 戴き持ちて 唐の 遠き境に 遣はされ 罷りいませ 海原の 辺にも 沖にも 神留まり うしはきいます 諸の 大御神たち 舟の舳に 導きまをし 天地の 大御神たち 倭の 大国御霊 ひさかたの 天のみ空ゆ 天翔り 見渡したまひ 事終はり 帰らむ日には また更に 大御神たち 舟の舳に 御手うち掛けて 墨縄を 延へたるごとく あぢかをし 値嘉の岬より 大伴の 御津の 浜辺に 直泊てに み舟は泊てむ つつみなく 幸くいまして はや帰りませ

反歌

大伴の御津の松原かき掃きて我立ち待たむはや帰りませ
難波津にみ舟泊てぬと聞こえ来ば紐解き放けて立ち走りせむ

天平五年三月一日に、良宅にして対面し、献るは三日なり。

山上憶良

謹上 大唐大使卿記室

(巻第五・八九四～八九六)

三十年の歳月が過ぎているとはいえ、この時の憶良も、渡洋上の最大の危惧である風波については、順風よく浪穏かには一言も触れていない。そればかりか、第一に大切なこととして、無事を祈つての安全往來の言挙げ(願立て)を強調している。「好去好来」を口にすると、「そらみつ 倭の国は 皇神の 厳しき国 言霊の 幸はふ国と 語り継ぎ 言ひ継がひけり 今の世の 人もことごと 目の前に 見たり知りたり」その言立ては裏切られることはない、という。

歌による呪術——言霊の幸わう力を、今の世の人もことごと「目の前に 見たり知りたり」と歌うのは、自分のかつての「大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ」の歌に籠めた、一路平安の祈りがかなえられたことの確信をふまえてであろう。「いざ子ども早く日本へ」の言挙げが、そのとおりになったことは、我も人も知るところ、あの歌を歌い上げて出航したもの、また大陸へ押し戻されてしまった、ということではなかった実体験の裏づけがあつて、いま「好去好来の歌」という言挙げの歌を贈ったのだ、と考えるべきだろう。

憶良は、「いざ子どもはやく日本へ」と出帆時に歌の予祝をした。そういうことのなかったらしい第二船以下は、ことごとく遭難し、幾多の曲折を経て、乗り組んだ人びとは、数年あるいは十数年後に辛うじて帰国しえた。だから、憶良は、実体験によって、言霊の幸わいということを痛切に感じていて、広成に祝福の歌を贈ったの

だ。八歌の力Vを信じ、それをもう一度と願ったのであろう。

この間に三十年ほどの歳月をはさんでの、憶良の二つの歌の対応のしかたを見ると、憶良の帰国時の幸運な航海が浮かび上ってくる。「いざ子ども」の歌と「好去好来」の歌のこのように関連のしかたも、憶良の伝記の一こまに組み入れてよいように、わたくしは考えている。

(註) 土屋文明氏の『万葉集私注』第一卷(一九四九)、沢瀉久孝氏の『万葉集注釈』巻第一(一九五七)など、戦後のものでも比較的早いものは、慶雲元年帰国説である。『日本古典文学全集』(小学館)本『万葉集』一(一九七二)、中西進氏『山上憶良』(一九七三)など後のものには、慶雲四年説が有力となったが、最近の井村哲夫氏『万葉集全注』巻第五(一九八四)は元年説である。

憶良の滞在期と『遊仙窟』の成立

張文成(張鷟)が書いた伝奇『遊仙窟』は、伝奇としては唐のはやい時期の作品であること、長文のものであることなど、注目すべき点をもっているが、それ以上に、本国の中国で散佚していて、日本に伝わっており、近代になって里帰りした、八佚存書Vのひとつとして有名である。しかも、日本でこの『遊仙窟』をいちばんに引用したのは、山上憶良である。

憶良は、「沈痾自哀文」中に、

天地之大徳曰生、故死人不及生鼠。雖为王侯、一日絶氣、積金如山、誰為富哉、威勢如海、誰為貴哉。遊仙窟曰、「九泉下人、一錢不直」。

(天地の大徳を生といふ。故に死にたる人は生ける鼠にだに及かず。王侯なりといへども、一日氣を絶たば、積みたる金山のごとくありとも、誰か富めりと為さむ、威勢海のごとくありとも、誰か貴しと為さむ。遊仙窟に曰く、「九泉の下人は、一錢にだに直せず」と。)

と記した。この箇所、原文では、

下官即起謝曰、

「乞漿得酒、旧来神口。打兔得麋、非意所望」

十娘曰、

「五嫂如許大人、專擬調合此事。少府謂言兒是九泉下人、明日在外談道、兒一錢不直」

とあって、わたくしの語学力ではとても歯が立たない、当時の会話語だが、魚返善雄氏の名訳『完訳遊仙窟』では、こう訳してある。

わたしは立つておじぎした。

「汁でよいのに、うま酒貰うた。兎どころか、小鹿でござる。」十娘が言う、

「ねえさんはなんの権力で、そんなに力こぶを入れるの……」

部長さんは、あたしなんぞ蛆虫で、やがてよその人に、あんなのペケだと言うわ。」(一九四八年、束書房)(傍点益田)

憶良のこのはやい『遊仙窟』引用は、『遊仙窟』そのものの成立年代決定上にも、重要な役割を演じるもので、たとえば、小島憲之氏はつぎのようにいった。

……遊仙窟を張文成(張鷟)の作とみなすことはまづ承認してよからう。その成立年代については、咸亨二年以後(671)開元初

年以前(713)、年齢五十歳以前の作との説があるが(劉開栄説)、後述の如く、わが遣唐使帰朝時に将来したものとすれば、下限は更に十年以上は溯ることが出来る。(『上代日本文学与中国文学 中』中国の劉開栄の『唐代小説研究』(下篇)の提出している、『遊仙窟』成立年代の幅をさらに大きく限定しうる手がかりとして、『万葉集』での憶良の『遊仙窟』引用が、重要なものであることがこれでもわかる。しかし、それには、「わが遣唐使帰朝時に将来したものとすれば」という条件がついてのことである。

いったい、なぜそうなるのか。憶良の「沈痾自哀文」は、巻第五で、すぐそのあとにつづく天平五年(733)六月三日の日付けをもつ、「老身重病経年辛苦及思兒等歌七首」(八九七・九〇三)とほぼ同じとき作られたものと見られる。遣唐使としての憶良帰還時に、本人が持ち帰った『遊仙窟』を読み、後年引用したと見るのが、ごく順当な考え方だろうが、『遊仙窟』の成立年代を、劉開栄の説のように六七年一七・一三年というような大きな幅をもたせて考えるとすると、憶良ら遣唐使の帰国は、その間の下限より大分早い時点にあたるから、そう速断してよいのか、という懸念をさしはさむ余地もある。

ややこしいことに、第七次の遣唐使一行は、一度に揃っては帰国できなかった。第一回の慶雲元年帰国組か、第二回の慶雲四年の帰国組、さらに大きく遅れて、第八次遣唐使の帰国に同行して帰った、第三回の帰国者の将来と見ても、天平五年の晩年の憶良の引用には間に合う。小島氏は、憶良が第一回の帰国組に入っていたと考えながら、第二回の組かもしれないとも思い、『遊仙窟』という書物は、

憶良とは別に伝来した、とも考えられないことはあるまいとも思案している。

遊仙窟の語句の引用を考へると、その伝来時を慶雲元年とほぼ推定してもあながち誤ではない。しかも和銅七年(714)、憶良が従五位に進んでゐることは、遅くとも慶雲四年副使と共に帰朝してゐるわけである。但し、これとても確実な断定は下すことはできない。……天平初期を中心として述作に用ゐられた事実より推定して、第八次遣唐使帰朝時に某人によつて伝へられたとも云へる。(前掲書)

そういう伝来の三つのケースを考慮して、「遊仙窟」の伝来時、その経路については、最も有力な慶雲元年説にも、多少の疑問が残る」(同前)と小島氏が結論するのも肯ける。

『遊仙窟』の成立年代が明確でない以上、『万葉集』への引用で限定しても、それは推定下限を溯らせることにはならないし、日本への舶載も三時点が考えられて、七〇四年・七〇七年・七十八年のいずれか、というのでは、不確定条件としてしか役立たない。わたくしは、『遊仙窟』の成立年代は、別のルートで考えていきたい。

『旧唐書』卷一百四十九、列伝第九十九に張薦伝がある。この人は『遊仙窟』の作者張文成の孫で、その伝記のはじめの方に、祖父文成のことが記されている。

張薦字孝举、深州陸沢人。祖薦字文成、聰警絶倫、書無不覽。為兒童時、夢紫色大鳥、五彩成文、降于家庭。其祖謂之曰、「五色赤文、鳳也。紫文、鸞^{ぐわん}也。為鳳之佐。吾兒当以文章瑞於明廷」、因以為名字。初登進士第、对策尤工。考功員外郎薦味道賞

之曰、「如此生、天下無雙矣」、調授岐王府參軍。又応下筆成章及才高位下、詞標文苑等科、驚凡応八挙、皆登甲科。再授長安尉、遷鴻臚丞……

『新唐書』卷一百六十一、列伝第八十六の張薦伝のはじめにも、ほぼ同じことが見える。

張薦字孝举、深州陸沢人。祖驚字文成、為兒時、夢紫文大鳥、五色成文、止其廷。大父曰、「吾聞、五色赤文、鳳也。紫文、鸞驚也。若壯、殆以文章瑞朝廷乎」、遂命以名。調露初、登進士第。考功員外郎驚味道見所対、称天下無雙。授岐王府參軍。八以制举皆甲科。再調長安尉、遷鴻臚丞……(傍点益田)

子どものとき見た夢の瑞相から、彼の祖父が驚と命名したとか、進士の試験のとき、試験官の驚味道が「天下無雙」と激賞したとか、その後八種の科挙に應じて、みな優等の成績をおさめたとか、めでたいこと尽しの書き方だが、官職の昇進はさほど順調ではない。両書を通じて、年代の明らかなのは、「調露初、登進士第」だけで、調露元年(六七九)に進士に及第したのだ。

張文成の著作に『朝野僉載』があるが、その一文に、こう書かれている。

文成、景雲二年為鴻臚寺丞。帽帶及緑袍並被鼠嚙、又蜘蛛大如栗当寝門懸糸。上経数日大赦、加階授五品。(『太平広記』卷一百三十七所引『朝野僉載』)(傍点益田)

彼が外交を司る鴻臚寺の丞となった直後、官服が鼠にかじられ、邸の門に栗ほどの大きい蜘蛛が巣をかける異変があった。意外やこれは瑞祥で、天下大赦、京官に加階の令が発せられ、五品に進ん

だ、と喜んでいる。鴻臚丞に進んだのは、睿宗の景雲二年(七一)とあるから、即天武后時代はそこまでも昇進していないのだ。不運だったともいえよう。景雲二年は、遣唐使の第二回帰国組が日本へとどいた、そのつぎの年である。

ところで、『遊仙窟』の日本伝来諸写本の巻頭には、

寧州襄楽県尉 張文成作

とあり、襄楽県の尉であった時代の作品と考えることができる。その年代はいつか。進士登第以後にきまっているから、『新唐書』によって、調露元年(六七九)の及第とすれば、劉開榮説の『遊仙窟』の成立年代上限、咸亨二年(六七二)を、そこまで下げることが可能であろう。しかも、それには何よりの拠りどころが、前野直彬氏によって挙げられている。前野氏は、張文成がほんとうに襄楽県の尉であった証があるかを問い、それを確めている。

……第一に、唐の莫休符の『桂林風土記』に、張驚が科挙に及第したとき、中書侍郎の薛元超が彼を襄楽の尉に任じたところの、彼がこの職についたことが立証される。(同氏編訳『六朝・唐・宋小説選』『中国古典文学大系』24)解説)

前野氏は、『新唐書』でわかる科挙及第の時期と組み合わせていないが、わたくしがそうすると、『遊仙窟』の成立は、調露元年直後の張文成の寧州襄楽県尉時代の何年間か、ということになる。

『桂林風土記』は、もと三卷あった(『新唐書』芸文志二)。現存の、『学海類編』や『覆学海類』などの叢書に収める一卷本は、逸文からの再編であろうか。科挙に及第した張驚に対して「特授襄楽尉」のはからいをしてくれた薛元超は、すでに中書舎人時代に多くの若

い英才を登用して名のある人物だが、左遷されていて、中央に返り咲いて、中書侍郎になったのが上元三年（六七六）（『新唐書』列伝第二十三）、中書令に昇任したのが永隆二年（六八二）（『旧唐書』本紀第五）。『新唐書』のいう張鷟が調露元年（六七九）に科挙に及第したというのと、『桂林風土記』の時の中書侍郎が彼を襄楽県の尉に登用したというのとは、年代も合い、大いに信じてよからう。

では、張文成がいつまで寧州襄楽県の尉であったかで、『遊仙窟』の成立下限を決めることができればよいが、いまのところははっきりしない。彼が、その後、同じ県尉の職としては、洛州河陽県の尉（『太平広記』卷一百七十一）、雍州長安県の尉（『旧唐書』『新唐書』張鷟伝）を歴任していることは確かである。山上憶良ら第七次遣唐使が長安滞在のころ、張文成はなにであったか。それを知る手がかりは、『太平広記』卷三百二十九（鬼十四）に引く、文成の著『朝野僉載』中の一文ではなからうか。

周長安年初、前遂州長江県丞夏文栄、時人以為判冥事。張鷟時御史、出為処州司倉、替帰往問焉。栄以杖画地作柳字曰、「君当為此州至」。後果柳州司戸、後改德州平昌令。（夏文栄）

最後に玄宗皇帝の開元のころ司門員外郎に昇っているが（『旧唐書』張鷟伝）、そのまえにも嶺南に流されたりしていて、彼の経歴には波瀾が少なくない。ここに掲げた『朝野僉載』の文章によると、即天武后の周の長安元年（七〇一）、すなわちわが国の大宝元年というところ、遣唐使一行が中国に到着の前年だが、「張鷟、時に御史たり」とあるから、御史の職にあったのだ。京官で長安にいた。そのころ、前の遂州長江県丞の夏文栄という運勢判断の名人がいた。江南の処州

司倉の役を終え、都に帰ったところの文成は、その夏文栄のところへ出かけて、自分の今後を見てもらうと、杖で地面に、「柳」の字を書いて、「あなたは、この州へおいでになることになりました」といった。のちに果たして、柳州の司戸となり、それから德州の平昌県令に替った、と述べている。

柳州は嶺南の果ての地で、左遷以外の何でもなからう。そこから河北道の德州の平昌県令に呼び戻されたのだから、今の地名でいえば広西壮族自治区の柳州から、山東省まで都へ近づいたことになる。その德州の平昌県令になったのは、即天武后の周が終わり、唐の国号に戻ってからのことらしい（『太平広記』二百八十三、「何婆」に、「唐浮休子張鷟為德州平昌令」とある。『朝野僉載』から採った文章である。）。

この『遊仙窟』の作者が、御史から辺境に左遷されたときのエピソードが、ふしぎに残っている。

武后時、中人馬仙童陷默啜。問、「文成在否」、答曰、「近自御史貶官」、曰、「国有此人不用、無能為也」。（『新唐書』張鷟伝）

默啜は突厥の可汗（王）で、即天武后の晩年、周を脅かしつづけた。あるときは結婚政策で周と和し、あるときは大いに侵寇してきて、その関係はややこしい。『旧唐書』本紀では、長安二年正月に「突厥寇塩、夏等州、殺掠人吏」とあり、交戦状況にあった。その十月にわが遣唐使が到着した。同書列伝の「突厥上」（卷二百九十四、列伝第一百四十四上）によれば、

長安三年、默啜遣使莫賀達干請以女妻皇太子之子。則天令太子男平恩王重俊、義興王重明廷立見之。默啜遣大臣移力貪汗入朝、

献馬千匹及方物以謝許親之意。則天譙之於宿羽亭、太子、相王及朝集使三品以上並預会、重賜以遣之。

とあり、一転して、突厥が和平通婚を申し出てきたことになっている。皇太子の息子に默噶の娘をめあわせたい、というので、即天武后が二度の使節を歓迎している。中国と侵寇してくる北方民族の關係では、先方から和平通婚を提案してくるのではなく、まず進攻に困惑して中国側から交渉しはじめるのが、通例であった。この時は、結局婚姻は成り立たず、即天武后の死後、突厥侵寇がはじまった。『新唐書』の張文成をめぐるエピソードにもどると、中人(宦官)馬仙童と默噶の間の会話は、默噶は、自分では長安に来ていないから、馬仙童が出かけていったときのことだろう。長安三年の突厥からの和平通婚申し入れに先立つ、下交渉に馬仙童が出向いたのか、第一回の突厥の使節入京と第二回の突厥の大臣入京の間に、こちらから默噶に会いにいったときのことだろう。とすれば、長安二年(七〇二)、三年の間のこと、まさに日本の遣唐使長安滞在中にあたる。

突厥の王默噶は、文名高い張文成の近況を尋ねた。内廷の諸情報を知悉している周の宦官は口をすべらせた。

「近く御史より貶官せん。(近いうちに御史から退けられましょう。)」默噶は、「国にこういう人材をもっていて、それを用いないなんて、能なしのやりくちだよ」といった、という。後代の王朝が編んだとはいえ、正史の記載である。無根の話ではあるまい。才があり、筆が立つけれども、なんとも使いにくい人間であつたらしい張

文成のことは、外国からはわからないのだろう。それにしても、馬仙童という人物は、事を未然に暴露する、傲慢不遜のやからだが、張文成も、中枢部のメンバーにそれくらい軽くしか見られていなかった、ということがいえる。

しかし、そのとき風前のともしびでも御史の地位にあった。ずっと低い地位の襄楽県(今、遼寧省)の尉の時代は、遙か以前であった。その時期の下限はわからないが、それは言いうることである。

伝奇『遊仙窟』の、日本の遣唐使船載の時期で、成立年代を限定しようとする従来の研究から離れて、それが、調露元年(六七九)から数年内に出来ていたことがわかると、日本への将来が、第七次遣唐使の第一回帰国組の手によってか、第二回帰国組、もしくは第三回帰国組あるいは第八次遣唐使の手によってかの問題は、成立年代とは別の問題となろう。山上憶良の長安滞在期には、『遊仙窟』はすでに書かれて、あった。彼が慶雲元年に持ち帰ったという想定が、成立論として早すぎるといふ心配は少しもない。将来したのが憶良と決めるのをためらったとしても、……

同時に、逆に

新羅、日本使至、必出金宝購其文。(『新唐書』張薦伝)

というような、新文学として張文成の作品を金に糸目をつけず買い漁る遣唐使の流行の、先鞭をつけたのが憶良だった、と考えても、『遊仙窟』の成立年代論からはおかしくなくなる、ということになる。

(文学部教授)